テニスの発展と伊達公子

～スポーツと女性と性差～

The Development of Tennis and the Role of Kimiko Date

～Sport and the Difference between Genders～

1K08B024-5　　井野宏輝

指導教員　主査　石井　昌幸先生　　副査　寒川　恒夫先生

【序章】

中学校１年生から取り組んできたテニスに対して技術だけでなく知識として学びたいと考えた。また引退はあったが、若くしてプロとなり日本女子史上最高ランキング４位をマークした伊達公子の強さと、12 年近いブランクがありながらも成功している要因は何であるか知りたいと考えた。そして女性とスポーツ、女性とテニスの関係について、伊達公子がどのような影響を与えたのかも知りたいと考えた。これらを主に文献を使い調べた。

【第１章】

12 世紀にフランスで行われた「ジュ・ド・ポーム」を起源とするテニス。最初は手のひらでボールを打ち合い、次第に手袋や木のヘラ、ラケットというように道具も発展してきた。ヨーロッパを中心に 15 世紀末より時代とともに絶頂・衰退をしてきたテニスは、明治初期ころ日本に伝えられた。ボールの都合上当初は軟式テニスが普及した。また硬式テニスは上流階級、軟式テニスは一般庶民というような風潮ができた。慶應大学をはじめ各大学が硬式テニスを採用したことと、硬式ボールの国産成功により、遅れて硬式テニスも全国に普及する。

【第２章】

一度は引退したが 40 歳を超える今も現役として活躍している伊達公子。人一倍負けず嫌いの伊達は幼少よりテニスに打ち込み 18 歳でプロとなり、世界各国を回った。体の小さな自分が世界で外国人プレーヤーに勝つために身に付けた速いテンポで打つ「ライジングショット」を武器に、伊達は日本女子史上初の世界ランク４位になる。引退後は最高のパートナーと語るミハエル・クルムと結婚し、人生とは何かなど多くのことを考える。12 年の歳月を経て現役復帰し、今もなお世界をまたにかけ活躍している。

【第３章】

20 世紀の女性とスポーツの関係は 1900～1940 年ごろはスポーツへの女性の参加の拡大時期、1940～1980 年代は「女性スポーツ」の拡大の時期、1980～現在はスポーツの女性参画を目指す時期といえる。伊達公子が女性とスポーツ（テニス）にどのような影響を与えたのかも文献を基に調べた。またスポーツにより男女で写真に撮られる枚数の割合に差があるなど、性差がテニスでも同様なのか調べた。

【第４章】

伊達公子の強さを「負けん気」「順応性」「合理主義」と考えた。本人も日本人と外国人とでは明らか体力・体格に差があるため、勝つためには何か武器が必要と語る。そんな伊達の武器となったのが上記３点である。幼少より「自分のことは自分で考え決める。自分の決断には責任を持つ。」と教えられてきた伊達は、天性の負けん気に加え、自分に合うフォームを常に考え実行し、レベルに応じて変化させてきた。もちろん世界ランク４位の伊達のテニスも魅力的だが、一女性としても伊達は魅力的だ。愛嬌ある笑顔で誰とでもすぐ打ち解けてしまい、普段は元気いっぱい、食べることが大好きな 163cm の彼女が、ひとたび試合となると獲物を狙う猛獣のごとき鋭い眼光でボールを睨み付ける。このギャップも彼女の魅力だ。

【結論】

試合と私生活で大きなギャップのある伊達。私は笑顔絶えない姿が本来の彼女であると思う。しかしこれは私が調べた主観的見解なため、今後はより時間をかけ客観的な根拠をあげ、説得力あるものにすべきだと考える。またスポーツ種目によって写真に撮られる枚数の割合に差があるということだったが、テニス雑誌を調べると明らか女性の写真が多くあった。また伊達が活躍していた当時何人かの女子プロテニスプレーヤーが活躍していたが、圧倒的に伊達の写真の方が多くあった。テニスにおいても性差・個人差があるように思われた。今後はなぜそのような事態が起こるのか、より深い研究が必要と考える。また女性とテニスの関係についても実施数の増減があることはわかったが、なぜそのような事態が起きたかまでは明らかになっていないため、そのあたりの研究も必要である。